

学 位 論 文 要 旨

氏 名 酒 井 仁 美

題 目 青年期の社会的認知及び対象関係とTAT反応との関連に関する研究

主題統覚検査 (Thematic Apperception Test, 以下, TAT) によるアセスメントに際し, スコアリングシステムとして社会的認知と対象関係尺度 (Social Cognition and Object Relations Scale-Global Rating Method, 以下, SCORS-G) を用いた場合の解釈妥当性を確認することが, 本研究の目的であった。

第1章では, 海外及び日本における, TATの解釈及び分析方法の歴史を, 量的研究を中心として概観するとともに, SCORS-Gの概要と, TAT物語を用いたSCORS-Gの先行研究について整理した。SCORS-Gは, TATのスコアリングシステムとして注目を集める一方で, 課題も指摘されており, 特に, 非臨床群を対象とした研究の蓄積が求められていることや, 文化差の影響を明らかにする必要があることを論じた。これらを踏まえ, 本研究の意義として, SCORS-Gの交差妥当性及び解釈妥当性が確認できることにより, TATの解釈が根拠に基づくものとなり, TATの活用拡大につながることで, 非臨床群のデータを用いたSCORS-Gの実証的研究を行うことによって, 尺度としてのSCORS-Gの信頼性及び妥当性の担保に貢献できる可能性があることを述べた。

第2章では, 研究1として, SCORS-Gの因子的妥当性について, 日本の大学生のTAT物語を用いて, 文化差, ジェンダー差を考慮して検討した。探索的因子分析及び確認的因子分析の結果, SCORS-Gは日本の大学生のデータを用いた場合に, 3因子構造を持つことが確認された。Siefert et al. (2018) との多母集団同時分析の結果, (a) Siefert et al. のデータと本研究の参加者全体のデータ, 及び (b) Siefert et al. のデータと本研究の女性データでは, 社会的因果性の理解尺度を除く尺度の因子負荷量を等値とした場合に測定不変性が認められた。(c) Siefert et al. のデータと本研究の男性データ, 及び (d) 本研究の男性データと本研究の女性データでは, 全因子負荷量を等値とした場合に測定不変性が認められた。結果から, 日本の大学生のTAT物語について解釈する際には, 社会的因果性に関する語りの詳細さについて, 男女差を考慮する必要があると考察した。

第3章では, 研究2として, TAT物語を用いて, 全8尺度を組み込んだSCORS-Gの因子モデルを, ジェンダーの影響と下位尺度間の関連を考慮した上で, 構造方程式モデリングによって構成した。研究1では, 単純構造を優先したために, 対人関係への感情投入尺度がモデルから外れたが, 対人関係への感情投入尺度を説明変数とし, 他の7尺度を目的変数としてモデルに組み込んだところ, モデルが安定した。結果から, 対人関係への感情投入尺度が因子構造全体に及ぼす影響について考察した。

第4章では, 研究3として, SCORS-GによるTATの解釈妥当性を, 多角的な精神的健康に関する自己

報告 (Adultt-Self report, 以下, ASR) との関連によって検討した。最初に, 全参加者を 1 つの集団として, ASRの下位尺度得点と, SCORS-Gの下位尺度得点との相関分析を行った。思考の問題尺度と, SCORS-Gの自尊感情尺度との間に負の相関がみられた。次に, ASRの下位尺度得点のパターンに基づいて, 潜在クラス分析により参加者を2群に分類した。SCORS-Gの下位尺度得点平均の群間差を分析した結果, ASR高得点群はASR低得点群よりも, 自尊感情尺度得点平均が有意に低かった。最後に, SCORS-Gの下位尺度得点のパターンに基づいて, 潜在クラス分析により参加者を 3 群に分類した。ASRの下位尺度得点平均の群間差を分析した結果, いずれの尺度にも有意差はみられなかった。追加分析として, ASR低得点群, ASR高得点群それぞれについて, SCORS-Gの各下位尺度得点と, ASRの各下位尺度得点間の相関分析を行った。ASR低得点群においては, いずれの下位尺度間の相関も有意ではなかった。ASR高得点群においては, ASRの「不安/抑うつ」尺度と, SCORS-Gの表象の情緒特性尺度, 価値観及び道德規範への感情投入尺度との間に, それぞれ有意な負の相関がみられた。ASRの「攻撃的行動」尺度は, SCORS-Gの自己同一性と一貫性尺度との間に, 有意な負の相関がみられた。ASRの「侵入性」尺度は, SCORS-Gの価値観及び道德規範への感情投入尺度との間に, 有意な正の相関がみられた。結果から, 青年期の自尊感情と, 思考の問題との関連について考察した。

第5章では, 総合考察として, SCORS-Gの信頼性及び構成概念妥当性, SCORS-GによるTAT解釈の有用性について, それぞれ検討した。日本の大学生のデータを用いた場合の, SCORS-Gの構成概念妥当性は確認できた。また, 一定の交差妥当性は確認できたものの, ジェンダー及び文化差の影響が表れることが明らかとなった。信頼性については, 文化の違いが評定基準の理解を難しくしている可能性がある」と推察した。最後に, 自覚的な精神的健康度が低下している者の対象関係を査定する上での, SCORS-Gによる解釈の妥当性が示唆されたことを踏まえ, 日本の司法・矯正領域での活用 の有用性について論じた。

以 上